

## 論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博士（文学）	氏名	岡本 慎平
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
論文題目 J・S・ミルの経験論哲学			
論文審査担当者			
主査	教授	松井	富美男
審査委員	教授	越智	貢
審査委員	教授	後藤	弘志
審査委員	准教授	衛藤	吉則
審査委員	教育学研究科教授	畠中	和生
〔論文審査の要旨〕			
<p>本論文は、十九世紀イギリスの哲学者ジョン・スチュアート・ミルのライフワークである『論理学体系』を中心に他の著作を読み解くことで、ミル哲学の全体像を描出することを目的としており、全体は序論、本論3部、結論からなる。</p> <p>序論は、先行的に本論の構成と内容を概説しながら、本研究の背景と目的を示す。</p> <p>第一部は3章からなり、ミルが「両極端の回避」という論述方針の下に、反目する学説や理論を緊張関係に齎して妥当な結論を導出し維持・発展させた旨を指摘する。第一章では、ミルの言語哲学の構想を明らかにした上で、彼が論理学の道具としての「言語」即ち命題の構成要素である「名前」の命名規則を改善することで推論上の誤謬可能性を減じたことを明らかにする。第二章では、实在論と観念論の調停問題に鑑みてミルの立場が直観主義に極めて近似的であることを示す。第三章では、ミルが『論理学体系』第五篇や『自由論』第二章において人間の可謬性の源泉を検討することで妥当な推論や道徳哲学の構築を目指したことを明らかにする。</p> <p>第二部は2章からなり、ミルが道徳科学の基礎となる人間観の構築のために、科学的世界観と人間の自由や性格の多様性をどのように調停しようとしたかを論じる。第四章では、人間の心がミルの科学的世界観の中でいかに位置付けられるかを、『ウィリアム・ハミルトン卿の哲学の検討』における他者の心の論証を手がかりにして明らかにする。第四章では、観念の「化学的」連合が科学的世界観における性格の多様性や動機の問題を構成することを示す。第五章では、事物の結合方法には完全に要素の特徴の和へと還元しうる力学的合成と、結合によって新たな性質が発生する化学的合成の二種類があると指摘する。</p> <p>第三部は2章からなり、これまでに理解された人間観を基に、ミルの倫理学説を古典的功利主義観から切り離してその独自性を明らかにする。第六章では、ムーア以降のメタ倫理学において位置付けられた「定義的自然主義」としてのミルの立場が、実際には彼の道徳的構想ではなく、人々の道徳感情と密接に絡み合った動機内在主義的な認知主義であることを示す。第七章では、今日までミルに付与されてきた「古典的功利主義」という呼称が不当であるのみならず彼の哲学が「帰結主義」でもないとする自説を展開し、従来の様々な「功利性の原理」の解釈に替わる最善の解釈を提出する。文字通り本論の中核をなす。</p> <p>結論では本論文での議論を総括しながら、ミルの目的を実現するためには社会全体に人々の性格を「活力的性格」へと形成する必要があると示され、『代議制統治論』で示された代議制民主主義の理論が、その重要な役割を担っていると指摘する。</p>			

このように、従来のミル研究が『功利主義論』や『自由論』などの社会科学の著作に限定されてきたのに対して、本論文は『論理学体系』を中心に『ベンサム論』や『コールリッジ論』などの他の関連著作も合わせて検討することで、ミル哲学の全体像を浮き彫りにしている。このような研究は、特に倫理学分野では、我が国はもとより世界的に見ても比較的僅少であり、加えて言語哲学のような近年脚光を浴びている先端的なミル研究も意欲的に取り込んでいる。自説の展開に当たって所々資料押えや論証の仕方に粗雑さが認められるが、『論理学体系』の側から『功利主義論』や『自由論』などの主著を読み解くことで、これまで哲学史の常識とされてきた「古典的功利主義」や「帰結主義」の枠組みからミルを解放して、新たなミル像を提出した点は甚だ独創的で高く評価できる。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（文学）の学位を受ける十分な資格があるものと認める。